

開催地名：静岡県湖西市	
開催日時	令和元年8月24日（土） 9：30 ～ 11：00
開催場所	健康福祉センターおぼと
語り部	草 貴子 （宮城県仙台市）
参加者	自主防災組織から推薦を受けた女性、一般市民女性 約60名
開催経緯	地域における女性防災リーダーの育成と、避難所運営に関する女性の積極的な参加をめざし、東日本大震災をご経験された女性の語り部からお話を伺うこととした。
内容	（１）はじめに 私たち市名坂東町内会は、平成20年に設立した町内会である。働き盛りの40代、50代の方、単身赴任家庭が多い中、私たち女性が立ち上がり町内会をつくりあげた。役員は現在も女性中心である。平成22年に完成した集会所は、緊急時の避難場として防災を強く意識した。行政機関ができることには限りがある。不足部分は私達住民が独自で対応することを念頭に、以下3つのスローガンを設定している。 ・地域住民相互の連帯と協調と主体性を持つ町内会 ・子供たちの健全育成支援とふるさとづくりを実現する町内会 ・災害、防災に適切に対応支援活動ができる町内会 （２）東日本大震災を受けて 3月11日、集会所を開けると女性と子どもたち100人が避難してきた。大半は町内会未加入のマンションの住民であったが、皆受け入れた。避難者の中でリーダー、副リーダーを決め、皆の前で紹介し、指示に従うように話した。泉区は内陸部で津波の被害もなかったため、避難所運営は結局2日間だけであった。そのときに学んだことを、そのあとの町内会活動に生かしている。 活動していく中で、町内会に入会していないマンションの方々（転勤族の若い家庭が多い）をどうするかという問題があった。東日本大震災は平日の午後、仕事を持つ人は職場にいる時間帯に発生した災害だったことを考慮し、未就学児を持つ若い母子を対象に、茶話会など子育て支援活動を週1回、集会所を利用してスタートした。また、減災をめざし、方言を使った防災かるたを小学校や児童館、社会福祉協議会に常備し、定期的なイベント等を開催している。 さらに、地域防災支援組織の実情として、理念のみでは行動が伴わないことや、情報機能がマヒしていたこと等の反省をもとに、市名坂小学校校区に新たな枠組みとして、総務班、情報広報班、救援班、食料物資班、衛生班、女性コーディネーターの6つの班構成からなる避難所運営委員会を設立した。

	万一の災害時に、地域住民は何をするべきなのかという認識を持つことが最も重要である。そのために、より実践的な施策をもとに議論を重ね、「いざ」に備える必要がある。また、物質的な援助だけでなく、メンタル的な部分もケアできる体制を目指している。さらに、地域の顔がよく見えることや気軽に声掛けできる雰囲気を考慮し、女性ならではの視点を活かして活動するために、女性コーディネーターを設置した。女性コーディネーターは、避難者の悩みや声を聞き出して、対応やアドバイスを行う。毎日の食事も大切であるが、排泄をはじめとする衛生的な問題について、女性ならではの細やかな配慮で対応していくことが期待されている。避難所運営委員会には、町内会の会長や副会長等の役職を持った人が入っているが、女性コーディネーターはや役職にとらわれず、趣旨に共鳴してくれた方や東日本大震災の時に活躍した方々がメンバーとなっている。 学校の備蓄倉庫には、仙台市から配給されている毛布やブルーシート、アルファ米、飲料水、投光器、仮設トイレなどを備蓄している。併せて、町内会から負担金を拠出してもらい、トイレトーパー、ゴミ袋、軍手、ラジオ、バケツ、鍋、石油ストーブ等を購入して保管している。眼鏡や入れ歯は替えがきかないので、災害時の避難には忘れずに持参してほしい。また、病院に行けないことを想定して、服用している薬とお薬手帳は携帯できるように心がけておくことが必要である。 最後に、私は地域の防災対策も、重要な根っこの部分は人と人とのつながりであると思う。人間同士の信頼関係を築くことが一番の基本である。今後も活動を通じてそれを築いていけたらと思う。
開催地より	自主的かつ女性目線で工夫を凝らし、常に住民の集まる集会所をつくり、さまざまな活動を行い、地域防災力の向上につなげていったことにとっても感銘を受けた。また、平時から人と人との関係の構築が一番重要であることについて、改めて考えさせられた。